

二強^て一サガ⁸

N E W S A G A

阿部正行

Abe Masayuki



A black and white illustration of a young woman with long, straight hair, looking slightly to the side with a gentle expression.

サキラ

グローリアス
『輝かしき』の名を持つ
スーラ聖王国の聖王女。



A black and white illustration of a man with long, flowing hair, shown in profile, looking towards the right.

ウルザの父親にして、
エブンの森の長を
務めるエルフ。

リファロ



A black and white illustration of a man with a large, bushy beard and a crown-like headpiece, looking forward with a serious expression.

ガラドフ五世

ドワーフの国ギルボールの
国王。三百年前の英雄
ガラドフ一世の子孫。



A black and white illustration of a young man with dark, spiky hair, looking slightly to the side with a slight smile.

主人公の魔法剣士。
一度魔王を倒したが、
真紅の宝石の力で過去に
戻り、再び冒険を始める。

カイル



A black and white illustration of a young woman with dark hair and a headband, looking forward with a slight smile.

ミレーナ

ジルグス王国の
美しき王女。
逝去した父に代わって
国を取り仕切る。



A black and white illustration of a man with a large, scaly headpiece, shown in profile, looking towards the right.

バスケス

戦闘民族である
リザードマンの勇者。



A black and white illustration of a man with dark, spiky hair and a goatee, looking forward with a serious expression.

シャリダン

大陸北にある人間の国
タイホンの王太子。

Main Characters
主な登場人物

大陸中央部にある、ギルボール王国。

ジルグス王国とはサングルド山脈を挟んで南北に隣り合い、同じように魔族領と接している、ドワーフの国である。

その国土は大きいとは言えず、人口もそれほど多くはない。しかし、特殊な立地条件と豊かな鉱物資源があることをドワーフ達が最大限に活かしているおかげで、非常に金持ちだという特色があった。

また国王のガラドフ五世は、三百年前の魔族との戦いで大活躍した、ドワーフの英雄である先祖ガラドフ一世に劣らない名君として名が知られている。

国力も相まって、しんぞく人種全体に対する大きな影響力を持つ国と言えた。

そのガラドフ五世は現在、居城の謁見の間にいた。

ここは家臣や他国からの使者との面会に使われる場所で、本来なら彼は玉座に深く腰掛けて、お鷹

揚で威厳ある王の姿を見せなければならない。

ドワーフにしてはやや瘦身長軀ではあるガラドフ王も、いつもなら、全てを見透かすと言われている鋭い眼光を玉座から投げかける。

しかし現在のは半ば腰を浮かすように身を乗り出し、熱い視線を送っていた。そこには、感嘆や羨望、果ては子供じみた憧憬まで、様々な感情が籠められている。

視線の先にあるのは二振りの剣だった。

一つは、神域にまで達したと言われるドワーフの匠が作り出した聖剣ランド。三百年前の魔族との大戦で、英雄ランドルフが魔王を討ち取ったときに手にしていたという、まさに伝説の剣だ。

人族魔族を問わず数多の敵を斬り裂き貫いてきただろうに、特徴的な黒光りする刀身には刃こぼれどころか微かな曇りすらなく、頼もしさと同時に畏怖さえ覚える。見つめていると、その妖しさに魅入られてしまうような気分にするなる。

ランドルフの死後、行方が解らなくなっていたはずのものが、ここにあるのだった。

もう一つは、千年以上前に滅んだ古代魔法王国ザールスの時代に作られたのであろう魔剣だ。

現在よりも遥かに栄えていた人族の絶頂期、その叡智が集まって生み出した黄金率とでもいうべきか、見ていて吸い込まれるかのような圧倒的な存在感を発している。

材質は貴重なミスリルと思われるが、そのせいだけではない異質な迫力を、長年にわたり武器を

見てきたガラドフは感じ取った。

見ていると柄を握ってみたい誘惑に駆られるが、正式な剣士でないガラドフには躊躇われる気がして、どうしても手が伸びない。そんな持ち手を選ぶ高貴さや神秘性さえ漂ってくる、見事な白刃だった。

技術の研鑽の極致にある剣と、叡智の結晶とも言える至高の剣。

ガラドフはまるで憑りつかれたように、それぞれ別の頂を極めた二振りの名剣から目が離せないでいた。

どれほどの時が過ぎたか、呼吸を忘れていたのを思い出したかの如き深いため息とともに、ガラドフはようやく視線を外す。

「見事……としか言えんな」

思わず漏れ出たといった感じの感嘆。声自体は静かなものだが、そこには隠しきれない興奮があった。

知らず知らずのうちに握りしめて強張った拳を緩めつつ、ガラドフは玉座に深く座り直した。

「光栄です」

そんな静かな興奮に対し、努めて感情を籠めないよう答えたのは、二振りの剣の脇に控えていた、白刃の剣の持ち主——カイルだ。



「う、うむ……聞きしに勝る名剣だ。これほどとは思わなんだ」

その声で我に返ったのか、ガラドフは改めてカイルを見る。そして、どうしたものかと深く考え込んだ。

ガラドフ五世は治世の能力も高く、公明正大で人格にも優れ、王として申し分ない。しかし唯一の欠点というべきか、武具の収集についてだけは公私混同しがちなのだ。

名高い武具があれば金に糸目をつけず買い求める癖があり、これに臣下が頭を痛めることも度々だった。現に今も、周りに控える臣下の顔に、またかと言わんばかりの表情が浮かんでいる。

当然、剣も多く所蔵しており、自慢の逸品ばかりであったはずだが、この二つの剣を見た後ではそれらもなまくら同然にしか思えなくなっている。それほど衝撃を受けたのだった。

だからこそ、眼福と思うと共に所有欲が疼き、是が非でも我が物にしたいという、収集家としてある意味当然の欲求が生まれつつあった。

だが同時に、今回ばかりはそれが難しいこともよく解っている。

ガラドフはこのギルボール王国において絶対権力者である国王であり、ここはその中心部である居城の中だ。いわば、全てがガラドフの自由になる場。

これが市井の好事家相手であったならば、王としての強権をふるったとしても、抗議されることもなければ充分に補償して報いることもでき、さほど問題はない。あるいはどこぞの宝物庫で死蔵

されていたものだったなら、ガラドフにも遠慮はない。

だがしかし、巷^{ちまた}で英雄ともてはやされている剣士から、現役で活躍している剣を取り上げるとなると、流石に外聞が悪かった。

それをねじ伏せることはできなくもないが、今回はやはり相手が悪すぎる。

ガラドフは改めてカイル——英雄と呼ばれる人間の若者の顔を見た。

現在のカイル個人に明確な立場や地位があるわけではないが、その知名度と功績は人族領全体に広まりつつある。

各地において人に害を為す魔獣退治を無償で行うどころか、施^{ほどこ}しまでする善行が知れ渡っていて、なによりも『竜殺し』という武人として最高位の名声まで得ている。もはや下手な王よりも有名なくらいだ。

特にここギルボール王国の隣国のジルグス国においては、魔獣ヒドラに襲われたミレーナ王女を救ったことを知らぬ者はいない。王都では、その救出劇を題材にした劇や本が好評を博しているという。

ギルボール王国とジルグス国とは長年の友好国で、様々な条約を結んでおり、ガラドフとしても自分の評判を落とすことはない。

更に厄介なことに、人族最大国家であるガルガン帝国の次期皇帝であるマイザー皇子とカイルは、

入魂^{じゅん}の間柄という噂だった。

ガルガン帝国は人族統一^{じくぜ}を国是に掲げている。地理的な要因と国の特性による絶対の防御に自信を持ち、帝国に対しても強気な態度を崩してはいないガラドフ王だが、それでも積極的に敵対したとは思わない。

無論、皇帝が個人の友誼^{ゆうぎ}で国の方針を動かすことなどあつてはならないはずだが、何が要因で拗^{こじ}れるか解らないのも外交だ。

秘匿^{ひとく}情報ながら、エルドランド第一皇子の急死に端を発した帝国の内乱の收拾にも、カイルが大きく貢献した、とも伝わってきた。そこまで深く関わっているのなら、カイルのために帝国そのものが動く可能性も捨て切れない。

極め付けに、スーラ聖王国の『輝かしき』サキラ王女とも交流を持ったとの情報もある。

その縁の深さは解らないが、全宗派の頂点に立ち、全人族から畏敬を集める聖女として名高いサキラ王女と敵対するなど、論じることさえ馬鹿らしかった。彼女の機嫌を損ねる真似は間違ってもしたくない。

この他にも、とても信じることなどできない荒唐無稽^{かうとうむけい}な噂もある。それらがたとえ尾ひれのついた結果のものだったとしても、カイルの功績と名声は到底無視できるものではなかった。

そうした様々な繋がりを持っているカイルは、ギルボール国にとってのみならず、人族全体にとつ

でも、対応を間違えれば一気に外交関係で窮地に立たされかねない、扱いの難しい存在となっている。そして今回は、ガラドフがカイルを招いたという形なのも問題だった。

最近売り出し中の英雄が持つ剣が素晴らしい、との噂がガラドフの耳にも届き、そのカイルが城下に来ているとのこと、ひと目見たいという軽い気持ちで呼び出したのだ。

カイルも「お見せするだけなら喜んで」と承諾し、仲間の剣も持ってきたという流れであり、献上にきたわけではない。その二振りの剣が、いずれも予想を遥かに超える稀代の名剣だったのが、ガラドフの誤算だったわけだ。

これで「剣を譲ってほしい」と申し出て、見るだけという前言を翻すのは、騙し討ちも同然。それに一度口に出せば、それこそ王としてその言をそう簡単に翻すわけにもいかない。王として、またコレクターとしてのせめぎ合いに、ガラドフは顔を歪ませていた。

肝心のカイルは、床に膝をつき、王と対するに相応しい恭しい態度をとっているが、どこか不敵さも感じさせた。

自分の内心の葛藤をよそに涼しげな顔をしているカイルに理不尽な怒りも湧いてくるが、流石にそれを顔に出すことはなく、ガラドフは考え続ける。

「何か問題でもありましたでしょうか？」

だが沈黙が続けるガラドフの様子を不思議に思ったのか、カイルが問いかけた。

「いや何でもない、大儀であった……また機会があれば是非見せてくれ」

結局ガラドフは王としての立場を取った。

せめぎ合いの末、この場は欲求を抑制せざるを得なかったのだ。

「では……」

カイルはゆっくりと、ガラドフに見せつけるかのように剣を鞘にしまう。

その鞘もまた見事で、聞いたところによれば鉾山都市カランの名高い鍛冶師、ガザスの作という。先ほどそれを聞いたときは、更にガラドフの所有欲が刺激されたものだ。

名残惜しそうに鞘に収まっていく刀身を見ながら、ガラドフは内心で大きくため息をついた。その後でカイルの活躍について尋ねると、この手の質問に慣れているのかカイルも淀みなく答えていく。

特にドラゴンを倒した際にはかなりの熱が籠もり、吟遊詩人の歌の一節の如き語り口であり、まるで何度も練習したかのようにあった。

そうしてあらかたの話が終わった頃。改めて労をねぎらう言葉をかけ、多少の金子なり褒美をとらせて下からせよう——と考えていたガラドフに、カイルの方から少し言いにくそうに話しかけてきた。

「その……一つよろしいでしょうか？」

「なんだ？」

「実はガラドフ陛下にお願いしたいことがありまして……」

「ほう」

これにはガラドフの方から食い付いた。

その願い次第では、交換条件として剣を手に入れることができるかもしれないからだ。何よりカイル側からの申し出なのだから、そうすることにも何の問題もないだろう。

「不躰^{ぶしけ}で申し訳ありません。このような場でお話することではないかもしれませんが……ご無礼にあたるかもしれませんので」

「何、言うだけならば何でも構わんぞ。無論、全てを叶えるとは言わんが、名高い其方^{そなた}の願いに腹を立てるほど狭量ではないつもりだ」

言い淀むカイルに、少し苛立つたガラドフの方から促す。

「さ、言ってみるがいい。富か？ 地位か？ それとも……」

「かつて行われていたエルフとの対話を……再開して頂けませんでしょうか？」
完全に予想外の申し出に、思わず絶句するガラドフだった。

ドワーフとエルフ。これまでに本格的な争いがあつたわけではないが、この両種族の仲が悪いと

いうのはこの世界の常識だ。

その歴史は世界の創世にまで遡^{さかのぼ}り、エルフの守護神である月と精霊の女神ムーナと、ドワーフの守護神である火と鍛冶の神レガネの仲が悪いのが発端とも言われている。

しかし何故仲が悪いのかと当事者達に問うと、大抵はうまく説明できず、最終的には感情論になつてしまう。

そもそも交流がほばないため、実際になにかしらの被害を受けた者もほとんどいないのだ。

とはいえ根深く染みついたこの問題は、そう簡単に解決できるものではないのも事実で、長い間両種族の不仲は続いていた。

「エルフとの対話か……」

全く予期していなかったカイルの願いにも、ガラドフは動揺を見せない。しかし明らかに機嫌の悪そうな顔になつた。

居並ぶ臣下達も、何を言っているんだという困惑顔になる者、エルフと聞いただけで明らかに不快そうになる者など、反応は様々にせよ、少なくとも好意的な反応は皆無だ。

だがカイルはそれらは一切気にせず、ガラドフを見据えている。

「何故そのようなことを言い出す？」

そんなカイルの視線を受けながらもやはり動じず、その真意が解らないと、ガラドフが怪訝^{けげん}そう

に言う。

「エルフと今更對話をせねばならない理由はない」

「今の状態が不自然だからです。エルフと、特にエブンの森に住まうエルフ達とは少なくとも交流を持つべきです。それがギルボール国にとって重要なことだからです」

エブンの森とは、ギルボール国と一番近いエルフの住む森だが、この国に住まう多くのドワーフにとっては目の上のコブぐらいの認識でしかない。

そのエルフと協力せねばならないような事態など、あるはずがなかった——ただ一つを除いては。「それはまさか……」

「はい、魔族が攻め込んだ場合のためにです」

魔族、というカイルの言葉が響いた瞬間、謁見の間に騒めきが広まった。

人間、ドワーフ、エルフを問わず人族全体の敵である魔族とは、有史以来戦い続けてきた。まさに人族にとって不倶戴天の宿敵だ。

だが最後に大戦があったのは三百年も前で、それ以降魔族が魔族領から出てくることはなく、最近はその姿を見ることができない。人族の中から徐々に警戒心が薄れているのが現状だ。

「魔族に対抗するためにはエルフの力が必要です。これは今までの歴史が証明しております。備えを疎かにするわけにはいきません、このままでは不覚をとります」

そして、カイルが更に言いつのろうとしたとき——

「馬鹿なことを言わないでもらおう！ エルフの力など借りずとも、我らは魔族などに負けはしない！」

ガラドフの側に控えていた、ギルボール国の重装騎士団の騎士が吼えた。

全身を金属鎧で固め、己の背丈より長い戦斧で床を打ち鳴らしているその姿は、カイルの眼から見ても相当に腕が立つ、まさに王の盾だった。

「そこまですておけ、ボグヌ」

「ですが陛下……」

ガラドフが軽く諫めるが、ボグヌと呼ばれた騎士はそう簡単に引き下がりそうはない。同様に他の騎士も興奮していて、カイルに詰め寄らんばかりだ。

しかしカイルは涼しい顔のままであり、まるで自分の身に危険が迫ることはない確信しているかのようだった。

「あなた方の力を疑っているわけではありません。ただそれでも足りないと言っているのです。魔族の恐ろしさは、身をもって体験しなければ解らないでしょう」

ここでガラドフは、カイルに関するある噂を思い出した。

「その言い方はまさか……」

「はい、私は鉦山都市カランにおいて、潜入していた魔族と戦いました」

カイルの言葉により、謁見の間に満ちていた興奮は冷水を浴びせられたかのように静まる。

「……噂は本当であったか」

ガラドフも渋い顔になるが、嘘だと否定することはない。

カイルに関する信じられないことばかりの噂の中には、魔族と戦ってこれを打ち倒したというものが、確かにあった。

三百年前ならともかく、今の世で魔族と戦ったなどそう簡単に信じられる話ではない。それでも事前にその噂を聞いていたことと、カイルの知名度と実績が、説得力を持たせている。

「なるほど、魔族の恐ろしさを知ったからこそか」

「はい、これが人族全体の問題だからこそ、私はここに来ました。そしてあのときの魔族の口ぶりでは、まだ把握されていないだけで結構な数が人族領に侵入しているようです……」

カイルはわざと不安を煽るように間を置き、室内に音を響かせてから、言葉を続ける。

「そして魔族は凄まじい強さでした。単純に比べられるものではありませんが、もしかしたらドラゴンよりも……」

カイルの重々しい言葉に、再び騒めきが広がっていった。

実際のところは、これは流石に大袈裟で、しかも魔族の強さは個体差が大きい。少なくともカラ

ンで戦った魔族ガニアスは、同じくカイルと戦ったドラゴンのグルードよりも強いとは言えなかった。

しかしカイルとしては魔族を警戒してもらわなければならないので、これぐらい言っておいた方がいい。

それにまるつきり嘘というわけでもなく、三百年前の大戦を生き残った魔族『三腕』などは間違いなくグルードよりも強かった。そもそもこの話に疑問を持てるのは、ドラゴンと魔族両方と戦ったことがある者だけなのだから、問題はない。

想像しただけで気圧されたのか、ボグヌをはじめカイルに反感を持って言いつのろうとしていた騎士達は押し黙ってしまう。

「……我がギルボール国は、ジルグス国と対魔族に関する盟約を結んでいる。決して備えていないわけではない」

ガラドフがゆっくりと言う。

確かに距離としてはジルグス国が最も近く、長い間仲違いを続けてきたエルフに助けを求めるよりも、友好国のジルグス国に助けを求める方が自然だった。

「はい、ですがそれが緊急時に本当に機能するかどうか解りません。何せサングルド山脈がありますから」

カイルの言う通り、両国の間には巨大なサングルド山脈が横たわっており、救援にはどうしても時間がかかるだろう。

「何よりも、いざそのときにはジルグス国も魔族の襲撃を受けているでしょう」

その妙に確信の籠もった言い方をガラドフはやや疑問に思うが、カイルは更に続ける。

「それに、二国間だけの盟約では足りません。三百年前のように、全ての人族が協力し合う必要があります……これは陛下の方が詳しくご存じのはずです」

三百年前の魔族との大戦で、ドワーフの軍がエルフの協力により、劣勢だった戦線を押し返したことがあった。これはドワーフがある意味で汚点と捉えている歴史だった。

カイルの言いたいことが解り、ガラドフも周りの騎士達も苦虫を噛み潰したような顔になるが、とりあえず口を挟むことはない。

「その縁で、エルフとの定期的な会談を提唱したのは、陛下のご先祖であられるガラドフ一世だったと、聞き及んでおります」

現在では神格化さえされているガラドフ一世は、共に戦い助けてもらったこともあるのが影響してか、エルフにも比較的寛容で、戦後も多少の交流を持っていた。

数年に一度の代表者同士による定期会談もその一つだったが、ガラドフ一世の死と共に中断され、もう二百年以上行われていない。

「定期会談は正式に中止と決められたわけではなく、あくまで延期になっているだけ、とも聞きましたが」

「よく知っているな」

ガラドフが驚きの声を上げる。

確かにカイルの言った通り、延期になっているだけで中止と決定したわけではない。

偉大なドワーフの英雄の肝^{きも}いりで始まった定期会談を、おいそれと打ち切れる者もおらず、あくまで延期という建前^{たてまえ}をとっているのだ。

ドワーフの中でもあまり知られていない、そして知られたくない歴史的背景を人間に指摘されるとは、ガラドフも夢にも思っていなかった。

「これを再開すること自体は問題ないのでは？」

「……………」

そう言われて、ガラドフは深く考える。

カイルの言っていることには全て筋が通っていた。

魔族の恐ろしさを身をもって知った結果、人族全体で立ち向かう必要があると判断したのだろう。人族ならば魔族に対し備えるのは、至極当然のこと。

そしてドワーフとエルフの対立に不安を覚え、こうしてその仲立ちをするのは、英雄として名が

知られている若者として相応しい行動とも言えた。

もし本当に魔族が攻め込んでくるならば、魔族領に接しているギルボール国は真っ先に被害を受けることになり、国家存亡にも係わる大事だ。

そしてジルグス国の救援が来る前にギルボール国を助けられるのは、地理的にエブン口の森のエルフだけというのも間違いない。

しかし、だからと言ってガラドフも素直に提案を受け入れるわけにはいかない。

理性的に考えれば、カイルの言っていることこそ正論。だが、正論だけではどうしようもないこともある。

「……対話とは我らだけではできまい、肝心なのはエルフ達だ。向こうから申し出がない限り、会談が再開されることはない」

ガラドフは、間違っても自分達から申し出るわけにはいかないという。

最低限そうした体をとらなければ、たとえガラドフが良くとも、臣下や国民が決して納得しないのだ。

「つまり向こう側から、エルフ側から申し出があれば……？」

「そのときは考慮しよう」

そんなことはあるはずがないと思いつつ、それでも言質をとられないよう、ガラドフは言葉をぼ

やかす。

ドワーフ達は人族の中でも人間の次に栄えており、他の種族とも盛んに交流を行っている。だからこそガラドフも、他種族であるカイルに色々と配慮していた。

だが、住まう森から出ることすらほとんどないほど閉鎖的なエルフがそうするはずはなく、カイルが森に入ることさえ難しいだろう。

「それが聞ければ充分です……この度は不躰なお願いを聞いていただき、誠にありがとうございます」

カイルもそれに気付いてはいたが、今回はここまでで充分と判断したのか、深く頭を下げて感謝を示したのだった。



ギルボール国の大通りを、カイルとその仲間達が歩いていた。

行き交う人のほとんどがドワーフではあるものの、ちらほらと人間や獣人なども見受けられ、なかなか活気がある。

どこからか鉄を叩く音が響いているかと思えば、国を広げんとする掘削音も聞こえてくる。酒好

きのドワーフらしく、まだ昼の時間だというのに酒場からは陽気な声が上がっていた。

実に喧騒溢れる賑やかな都市だ。

「まったく、無遠慮にしつこく見おつてからに」

そんなドワーフの国を感じているカイルの後ろを、不機嫌そうに歩くのはシルドニアだった。先ほどの謁見の間でのことを言っているのだ。

あの場にいたのは一行の中でカイルだけだが、シルドニアにとって本体はあくまで剣であるため、自分のことをじろじろと見られたのと同じだった。

「まったく何で俺の剣を……」

こちらもぶつぶつと文句を言っている、聖剣ランドの持ち主であるセラン。

一時的とはいえ愛剣を手放していたのが、どうも落ち着かなかったようだ。ようやく腰に戻ってきた愛剣を撫でながらぼやいている。

「仕方ないだろ。ガラドフ王の武具の収集癖は有名だからな、まずはじめに機嫌を取りたかったんだ。見せたかったくらいだぞ、あの興奮ぶりを」

カイルが苦笑しながら二人を宥める。

「シルドニアだけよりも二本あった方が良くからな、おかげで話のつかみは上々だったぞ」

実際、二本の名剣に心を奪われたガラドフの隙をつく形で、エルフとの件を上手く切り出せたの

は間違いなかった。

「それにガラドフ王は名君だ、無理矢理取り上げるような愚かな真似はしないさ」

多少公私混同するところもあるが、それも王としての責務に差し障りのない範囲でだ。今の自分に強権を振るうことはない、カイルは確信していたように言う。

「でも結局、エルフとの話し合いはしないんでしょ？ やっぱりウルザの言った通りになったじゃない」

とても名君とは言えない、とリーゼが少し不機嫌気味にこぼす。

エルフであるウルザはこの国に入ることができず、今はもう一人の仲間のミナギと共に別の場所にいる。

ウルザとしてもやはりドワーフには色々と思うところがあったようで、分らず屋のドワーフを説得して会談を再開させるのは無理だ、と断言していた。

「そうでもない、手応えはあったし、むしろ想定よりいい。少なくとも不意打ちからの切っ掛けとしては充分だったさ」

勿論一番の理想は、会談をドワーフの側から申し込むよう誘導するというものだったが、これはほぼ無理だとはじめから解っていた。

考慮する、という言葉を引き出せなかったら、また何回か面会を求めなければならなかったとこ

ろだ。

「あと、魔族と戦ったというのはやはり衝撃的だったようだな」

カイルはこれまで魔族に関して他言したことはなく、戦いの事実を知っているのは関係者であるガルガン帝国とジルガス国の中でも一部のみだった。

「これからは少しずつ、でも確実に魔族の脅威を知らしめていかなければいけないな」

「でも……」

力を籠めて言うカイルに対し、リーゼが何か意見しようとしたが、結局は口籠もる。

リーゼが何を言いたいかは解っていて、カイルもまた何も言えなかった。

カイル達は既に何度も魔族と関わっていて、その根本的なところは人族と大きく変わらないと理解していた。特に何度か共闘もしているユーリガなどは、少なくともリーゼにとってはもう友人と呼んで差し支えなかった。

カイル自身も、現魔王であるルイーザと取引相手という関係を結んでいる。

だがそれでも止まるわけにはいかない、個人間では友誼を結ぶことはできても、人族と魔族が相容れることは決してないのだから。

「で、要件は終わったんだろ？ とりあえずこの国を出るか」

そんな微妙な空気を知ってか知らずか、いつものセランの空気を読まない声がかかる。

「思いの外、居心地よかったけどな。しかし地下都市ってのも、来る前に想像していたよりかすげえな」

セランが天を見上げると、そこにはあるべきはずの空はなく、剥き出しの岩盤がある。

というのも、ギルポール国は地中深くの巨大な空洞内にある地下王国で、そこにおよそ十万を超えるドワーフが住んでいた。

「むしろ地上より過ごしやすいくらいよね。どうなってるのかな？」

リーゼが辺りを見渡しながら感心したように言う。

地下ではあるが、魔道具による灯りがあちこちに設置されているため、流石に全体的に薄暗いながらも生活するのに不自由はない。更には夜の時間帯には暗くなり、ちゃんと外と同じ一日のサイクルがあった。

どんな技術なのか、気温や湿度の調整もできているようで、一番の問題であろう空調も無数の通風孔のおかげか息苦しさは感じられず、地下とは思えないほど快適だ。

地下水を引いた川まであり、どこかには畑や牧場もあるそうで、その気になれば十年単位で籠城できるらしい。

「そして頑健よな、確かに人族の国の中で最も防衛に適した国じゃな」
シルドニアも同様に感心する。

壁面が剥き出しの岩盤なので、圧迫感はあるが、同時に強固さを物語ってもいる。

ここにたどり着くまでには、入り組んだ地下道を通らなければならないようになっていた。つまり人々間の戦争で基本となる人海戦術による攻撃は全くと言っていいほど効果がなく、最も難攻不落な国であるのは間違いない。

この絶対の防御がギルボール国の自信となり、ガルガン帝国に対してさえも毅然とした態度を崩さないでいられた。

「だからこそ、圧倒的な個の力を持つ魔族に敗れた」

カイルの言葉は呟くような小声だったが、そこには重々しさが溢れており、仲間達は一様に黙ってしまう。

カイルが体験した未来では、魔族の一斉攻撃、『大侵攻』で真っ先に滅んだのが、このギルボール国だった。

いつもと何も変わらなかったその日、何の前触れもなく西の魔族領から現われた魔族が一気に攻め込んできた。

地下通路は限られた人数ずつしか通れないが、一人で人族の兵千人以上に匹敵すると言われていた魔族にとっては、むしろ限られた空間が有利に働いた。

そして侵入路が少ないということは、逃げ道も限られているということ。無論ドワーフ達も力の

限り抵抗したが、一度侵入されると脆かった。

「確かに魔族ならこの防御も破りおるな」

「その『大侵攻』のときは魔族もほとんど死兵だったんだろ？ 一度懐に入られると相当きついな」

さもありませんとばかりに頷くシルドニアとセラン。

カイル達の脳裏には、この地下王国が死すら覚悟した凶暴な魔族に蹂躪される地獄のような光景が浮かんでいた。

ふざけ合いながら脇を走り抜けた小さな子供達が、幻の火の海の中へと消えていく様子を想像し、リーゼが悲しげな顔になる。

「だが盟約を結んでいたはずのジルグス国からの救援は来なかった……同じように魔族の襲撃を受けていたからだ」

そのときのことは決して忘れない、とばかりにカイルの顔は憤激に歪み、歯ぎしりが鳴る。

こと同時に攻められたのはカイル達の故郷のリマーゼの村であり、あつという間に壊滅状態になった。

その後、幸いと言うべきか魔族はギルボール国の侵略を優先したようで、一時的にジルグス国での魔族の攻勢は弱まり、立て直す時間が出た。

そこですぐさま他国、特にギルボール国と連携を取って魔族に対抗すべきだったのだが、当時の

国王レモナスが欲を出した。危機に陥ったところを助けて恩を着せようと、正式な要請が来てから救援に向かう、と決定したのだ。

自国の防衛を最優先するというある意味では当然の選択であり、またギルボール国の難攻不落ぶりを良く知っていたからという側面もあるものの、これはあまりにもマズい判断だった。

結果、ギルボール国は援助を出す間もなく、数日で滅んだ。

それは文字通りの完全な滅びで、十万を超えるドワーフ達が一人残らず殺されるか魔族領へと連行された。

人族でも一、二を争う強固な国が真つ先に滅ぶ——この到底信じられない報に人族領は激震し、慌てて連携を取ろうとするが、その時点で魔族は人族領に深く食い込んでいたため、国同士・種族間の連携を阻害、分断され、各個撃破されていく。

この初期対応の失敗は他の国でも起こっており、人族が滅亡寸前にまで追い込まれる大きな要因の一つだった。

「あれを繰り返させるわけにはいかない。そのためにドワーフとエルフとの対話は必ず成功させる」

カイルは爪が食い込むほど握り拳に力を籠め、断固たる決意と共に言った。

「で、でも良かったね、カイルのしてきたことが評価されて」

またも重くなりかけた空気を打ち消そうと、今度はリーゼが明るい声を出す。

カイルの当初の目的の一つであった、英雄となつて人族全体に影響力を持つことは、ほぼ達成できたと言える。

これまでの功績と広まった名声により、カイルの発言が無視されるようなことはなくなり、実際に一国の王であるガラドフも配慮するレベルになった。

今までの行動は無駄ではなかった。仲間がそう言ってくれる気遣いはカイルにとって本当に嬉しく、また心強かった。

「……確かに耳は貸してくれるようになった。だが、動いてくれるかどうかはまた別だ」

しかし、英雄になるのはあくまで目的のための手段に過ぎないので、そこで満足するわけにはいかない。

そして次の交渉相手は、そんな名声など通じないエルフだった。

「エルフかあ……ウルザに期待するしかないね。上手くいっているといいんだけど……？」

この場には仲間のことを考え、リーゼが不安そうに言う。

エブンロの森はウルザが生まれた場所であることもあって、先行して話し合いの場を作ってもらっている。

相当な難事であるにせよ、ウルザが何としてでも成し遂げてくれるはずだ、と皆が信じていた。

「信じるしかないな」

カイルはエブンロの森のある方向を見ながら、そう呟いた。

2

ギルボール国を出て、なだらかに続く平原を進むこと五日。カイル達はエブンロの森の外縁部に来ていた。

事前に決めていた待ち合わせ場所に向かうと、そこにいたのはカイルの仲間の一人、ミナギだ。

「予定通りね、カイル」

ミナギはやってきたカイル達を見て、軽く微笑^{ほほえ}む。以前のミナギならば、こんなふうに表情を変えることなどなかっただろう。しかし、師にして育ての親であるソウガとの対決を経て、心境の変化があったようだ。

そして仲間達はその変化を好ましいものとして受け取っており、カイルも軽い微笑みでそんなミナギに応える。

「こっちは大体上手くいっただ。そちらはどうだ？」

魔道具を使った定時連絡で互いの状況は大体解っていたが、一応確認をとる。

「変わっていないわね。今、ウルザが森に立ち入る許可を貰いに行っているところ」

エルフでない者を許可なく森の中に入らせないという掟^{おきて}があるために、はじめにウルザがその許可を得るべく森に入り、ミナギは待機していたという。

「ただ、予定ではもうとつくに戻ってきていい頃なのだけど……」

そう言っただけ不安げな顔を見せるミナギ。

エルフ達の居住区はここから丸一日かかる場所。それでも往復二日で戻ってこられるはずだ。だが今日で既に七日。何かしらのトラブルが起こった可能性もある。

「でもこっただけでウルザの故郷の森なんですよ？」

「ウルザは半ば強引に飛び出したって言うていたからな、急に戻れば……場合によっては拘束されているかもしれないということか」

シルドニアがぼそりと言うと、一行は静まりかえってしまう。

あくまで可能性の話だが、こういうときは考えれば考えるほど、嫌な方向に思考がいくものだ。カイルがミナギを見ると、彼女はそつと首を横に振る。

実は、隙があればウルザの後をつけてほしいとカイルから頼んでいたのだが、人間の中では最高峰の隠密技術を持っているミナギでも、森の中でエルフの眼を誤魔化^{ごまか}すのはやはり無理だったよう

だ。

「ウルザはともかく、他のエルフの眼がね……」

ミナギはちらりと森の奥を見る。どうやら現時点でも、こちらを監視している眼があるようだ。

「……ここはウルザを信じて待つしかないか」

不安はあるがそれしかないか、とカイルが言ったとき――

「いや、その必要はないようだぜ」

セランが森の奥から複数の気配がやって来るのを感じとった。それは獣などではなく、明らかに意思を持つ人だった。

やがて姿を現したのは、二人のエルフ。

一人はウルザで、もう一人は人間なら二十代前半くらいであろうエルフの若者。彼はロングボウを手にしており、背には矢筒がある。

エルフラしく整った顔立ちなのだが、そんなことよりカイル達に向ける視線に明らかな嫌悪が混ざっているのが印象的で、歓迎していないのがよく伝わった。

「来ていたのか」

カイルを見つけたウルザの顔は**純び**、小走りで駆け寄る。

その瞬間、カイルはあることに気付いたが、それを悟られないようポーカークフェイスを貫く。

「とりあえずは会って話を聞いてくれるそうだ。かなり手こずったが……」

ウルザが少し疲れた様子で言う。口にした通り、そこに持つていくまでに相当の労力を費やしたのだろう。

「そうか……本当にありがとう。助かったよ、ウルザ」

カイルがそつとウルザの肩に手を置き、優しく微笑んだ。

「べ、別にカイルのためだけではない。これはこの森のためでもありエルフ全体のためでもあるのだから」

ウルザが確信したように言うが、その顔には少し朱が差していた。

「そ、それとこっちはソレイス、私と一緒に皆を案内する」

「初めまして、カイルと言います」

カイルとしては礼儀正しく挨拶をしたつもりなのだが、ソレイスは眉根を寄せて不機嫌そうに睨み返すだけだった。

「……やはり人間をこの森に入れるのは反対だ」

「まだ言っているのかソレイス。カイル達は客人として迎え入れる、そう長老会で認められたはずだ！」

ソレイスと呼ばれたエルフは、カイルに対する**敵愾心**を隠そうとせず、睨み続けていた。

エルフが重大なことを決める際は、森の長と数名の代表者による合議制が採られており、大抵は年長者が代表者として選ばれるために長老会とも呼ばれていた。

「人間を神聖な森に入れるなどあつてはならないことだというのに……ウルザも解っているはずだ、エブンの森はただの森ではない！ エルフの中でも我らしか入れない特別な森なのだぞ！」

エブンの森は、神話の時代に精霊神ムーナが降臨したエルフ発祥の地とも言われていて、全エルフが敬意を持つ聖地という扱いだった。

それ故、この森に住むエルフは他のエルフに対してさえも優越感を持っている、とウルザは説明していた。

「……そういった視野の狭い考えが根本的に間違っているんだ。私達は特別でも何でもない」

「ウルザ、君は外の世界に毒されたのか！」

ソレイスはウルザに怒鳴るが、言われた当人はため息をつくだけだ。

「解った、案内は私がするから、ソレイスはそこで待っていてくれ」

さあ行こう、とウルザは森の中へと向かい、カイル達も顔を見合わせた後、それについて歩いていく。

「ま、待て！ ……私はこのような連中を案内するつもりはない！ 何か企んでいないか監視をしに来たんだ！」

無視された形となったソレイスはそう叫ぶと、カイル達の後についてきた。

一行はエルフの居住区を目指し、ウルザの案内で森の中を進んでいく。

ソレイスは最初に言ったように案内をしようという気はなさそうで、一切口を聞かず監視に徹し、少しでも妙な真似をすればすぐに射殺してやる、と言わんばかりだった。

カイル達もはじめはソレイスの態度を気にしていたが、いつまでもそんな些末事を気にするような者はいなかった。

やがていつものように軽口を叩き始め、案内役のウルザもそれに混ざる。

日が暮れ始め、野営の準備を始める頃には、ソレイスをいないものとして、いつもの旅のようになつていた。

この森では火が禁じられていたが、事前にそれを知らされていたリーゼが熱を発して調理ができる魔道具を用意していたため、温かい食事を取ることもできた。

メニューは、団子状に練った小麦粉や下拵え済みの鶏肉に葉野菜と根野菜を、煮詰めたブイヨンで作った固形スープの素を溶いた汁で煮込んだものだ。

このブイオンはリーゼが厳選した素材を丸一日以上かけて煮込んだ特製のもので、非常に旨みが強く、カイル達にとっても好評だった。

そしてデザートは、女性陣の強い要望により甘いものが用意され、流石に生クリームを使ったケーキではないにせよ、バターと砂糖をふんだんに使ったクッキーを濃い目の紅茶と共に頂く。

これらも鼻をくすぐる適度な香ばしさと口に広がる甘みとが絶妙で、いくつもの種類の茶葉から厳選してきた紅茶とよく合っていた。

日中の食事は移動を優先するために保存食で簡単に済ませる場合が多いので、夜はこのように贅沢に過ごすのがカイル達の方針になっている。

美味しい物を食べていれば最低限精神は安定する……というのがリーゼの持論で、だから常に手間も金も掛けて皆のために食事を用意していた。

旅から旅へと長期の移動が続く、身体的・精神的疲労が溜まりやすいカイル達からしてみれば、このように食事面でリラックスできることは本当にありがたく、リーゼにはとても感謝していたのだ。

「そう言えばウルザはやっぱり子供の頃、この森で遊んだの？」

クッキーを齧りながらの雑談の話題は、やはりというべきかこの森のことに移り、リーゼはウルザに訊ねてみる。

「そうだな……よく走り回ったものだ」

昔を思い出したのか、懐かしそうなウルザ。

「森の中で遊んで隅々まで知ってしまったと、今度は外が気になって……出てはいけないと言われていたが、よく縁まで行ったものだ」

その頃から好奇心が強かったようで、今と変わらないとカイルは苦笑する。

「行っってはいけない……と言われると行きたくないんだよなあ」

特に子供は、と絵に描いたような悪ガキだったセランがうんうんと頷いている。

「何となく想像がつかない、ばれて怒られたこともあっただろう？」

カイルの断定口調にウルザは不機嫌そうになるが、否定はできないところからして、どうやら凶星のようだ。

辺りには紅茶の香りと笑い声が満ち、夜の森の中とは思えない雰囲気になっていた。

——ただ一人を除いては。

「やはり君を外の世界に行かせるべきではなかった。ここまで人間達に懐柔されてしまうなんて……！」

リーゼが氣遣って一応用意した食事にも手を付けず、それまで黙っていたソレイスが、絞り出すようにして嫌悪すら滲ませる声を出した。和氣藹々とした様子が我慢できないとばかりに、歯ざりさえしている。

「……私は外に出て本当に良かったと思っている。世界というものを少しは知れたのだから」

淡々と、しかしはつきりとした口調でウルザは言う。

「何故だ！ 私達は森のただけで生きていけるはず。なのに何故、外と関わろうとする！」

「それはただの停滞だからだ。繋がりを断てば取り残されていくだけだぞ。その点についてだけ言うのなら……ドワーフの方がまだましだ」

最後の方は流石に口籠もったにせよ、ウルザにはつきりと告げられて、ソレイスは呆然としてしまふ。

「そして大事な人……人達と会うこともできたんだ」

断言したウルザに対し、ソレイスは大きく舌打ちした後、「見回りをしてくる！」と吐き捨てるように言つて森の闇の中に消えていった。

「すまない、みんな」

「ウルザが謝るようなことじゃないでしょ」

「あれはあれで私のことを心配してくれているんだ。幼馴染でいい友人なのだが……」

先ほどまでの空気を壊してしまったと気落ちして、ウルザは大きなため息をついた。それを見て、リーゼは少し呆れてしまふ。

「うん、気付いてないんだね……あたしも人のことは言えないけど……こういうのつて自分じゃ解らないのかなあ」

何やら意味ありげなリーゼの言葉に、ウルザは首を傾げる。

「どういう意味だ？」

「……あたしよりもカイルに聞いたら」

まるで殺し屋のような凄まじく冷たい眼でリーゼはカイルを見る。

「ウルザが大事な人、と言ったあたりで随分と勝ち誇ったかのような顔をしておったな。昼も会った早々あのエルフを挑発しておったし……器が小さいのう」

目ざとく観察していたシルドニアがやれやれと首を横に振る。

セランは面白そうにニヤニヤしているし、ミナギは我関せずといった表情ながら時折チラチラとカイルの方を見ている。

「ごほん……そうだ、ギルボール国でのことを二人に説明しておこう」

わざとらしく咳払いした後、カイルは誤魔化すようにして話題を変えた。実際誤魔化しているのがあるが。

リーゼもこの場での追及は止めたようで、口は挟まない。

ただあくまで保留であつて解決したわけではないことは、当のカイルにもよく解っていた。

（何とかしないと……でもどうするか？）

これに関してばかりは答えなどない。やることはつきりしている、世界を救うということの方

がまだ簡単に思えるカイルだった。

3

「やはりそうだったわね」

カイルがギルボール国でのガラドフとのやり取りを説明すると、ミナギは予想通りだと感想を漏らす。

「ああ、だが少なくとも悪くはない反応だった。エルフ側の出方次第で、会談を再開することだからな」

「こちらから……エルフから会談の再開を申し込むというのは、相当に難しいぞ」

ウルザでさえ、未だドワーフには複雑な感情を持っているのだ。会談の実現がどれほど困難なところか想像できなかった。

「長老会には、私の父もいるが……あの人は私の話を聞いてくれないしな」

ウルザが目を伏せて少し寂しげに呟く。それだけで、父親との間に確執^{かくしつ}を抱えていることがよく伝わった。

リーゼが何か言いたげだったが、踏み込んでいいのかどうか判断できず、結局声をかけることはなかった。

「……それと言われた通り、ただ交渉したいとだけ話して詳しい内容は伝えていないが、それで大丈夫なのか？」

「エルフとドワーフとの協力は必要だ……今回移動してきて、改めて確信したよ」

実は『大侵攻』のときにジルグス国がすぐに援軍を出していても、間に合ったかどうかは微妙なところだった。

一方で、ギルボール国とエブンの森の間は平原のため移動に適しており、何よりエルフには風の精霊に命じて進軍速度を上げることができる。ギルボール国が襲われたとしても、恐らく一日もあれば救援に向かえる。

今はカイルが魔族に影響を及ぼしているため、魔族の一斉攻撃が起こるかどうかは解らないが、起こるものとして行動していかねければならない。

初戦でギルボール国を滅ぼさないために、エルフの協力が必要だとカイルは確信していた。

「さて、明日は大変だ。早めに休んでおう」

「あれ？ 見張りはいいの？」

いつも野営するときは必ず交代制で見張りを置いているが、それを決めずに休もうとしているカ

イルに、リーゼが問う。

「今回は大丈夫だ。俺達のことをこれ以上ないほど見・守・つ・て・く・れ・て・る・人・が・い・る・か・ら・な」

きつと、少しでも怪しいところはないかと目を皿のようにしているはずだ、とカイルはニヤリと笑うのだった。



翌日、寝不足らしきソレイスを連れて森を進んでいくと、昼頃になってようやくエルフの居住区が見えてきた。

そこは樹齢千年は軽く超えていそうな巨木が並んでいるばかりで、不思議なことに地面の上を歩いているエルフはほとんどいないし、住まいらしきものもない。

それもそのはず、エルフは皆、樹上に住んでいた。

見上げると、まるで蜘蛛の巣のように樹々の枝から枝へと橋が張り巡らされていて、そこをエルフ達が歩いている。

「樹上都市か……」

「慣れれば結構便利だぞ」

ウルザがカイルに軽く笑いかけながら、巨木に巻き付いたらせん階段を上っていく。

上からの眺めはまさに緑一色で、樹そのものが家になっていた。ウルザが言うには、苗木に魔法をかけてそうした形へと成長させるらしい。

「地下都市の次は樹上都市か、ほんと正反対だな」

きよろきよろと周りを見渡しながら、セランがそんな感想を漏らす。

店舗らしきものは存在せず、当然ながらエルフ以外を見かけることはない。

ギルボール国の活気ある喧騒とは対称的な、趣ある静謐^{せいひつ}とでも言うべきか。ここには万を超えるエルフがいるそうだが、時折風に揺れる樹々の騒めき以外に聞こえるものはなかった。

ウルザに先導されて歩いていく一行に、エルフ達の視線が注がれる。

中には興味深そうな視線もあるが、人間が何をしに來た、と言わんばかりの負の感情が籠められているものが大半だった。

とはいえ、無論そんな視線で気圧されたり委縮^{いしゆく}したりするような面子^{めんつ}ではなく、堂々とした態度で進み続けた。

「やはりエルフは相変わらずのようじゃな」

少し呆れた感じでシルドニアが言う。

ソレイスは極端にせよ、それでもエルフとしては当然の反応だったということだ。

「そうね、何でもこんなに自分達以外を嫌うんだろ。もっと……あ、ごめん」

思わずエルフに対する文句を言ってしまうそうになったリーゼが、前を歩くウルザに謝る。

「気にしないでくれ、事実なのだから言われて当然だ」

ウルザはそう自嘲気味に笑う。

「このままでいいとは思っていないが、もはや染みついているから……どうすればいいのか、私には解らない」

「そうなの？　でもウルザみたいな人が増えていけば、きっと良くなると思うよ」

リーゼにとってはウルザがエルフの基準になっており、決して難しいことではないと思っっているようだ。

「そうだと……いいんだがな……」

ウルザの独り言のような呟きは、すぐに掻き消えてしまう。

中心部にあるひととき大きな樹に着くと、ここまで黙ってついでにだけだったソレイスが口を開く。

「これは生命の樹と呼ばれている、我らエルフの母なる樹だ。これより大きな樹木は、ドラゴン達が住まうという世界樹だけであろうな」

ソレイスが説明する口調はまるで自分のことのように自慢気で、どうだ人間どもよ、と言わんば

かりだ。

確かに神々しささえ感じられる立派な樹だが、かつてその世界樹に行き、中に入ったこともあるカイル達にとってはそれほど目新しいものではなく、微妙な表情にしかならない。

ウルザなどは、同族の井の中の蛙^{かわず}ぶりを見て恥^{かたじけなく}ずかしそうな顔になっている。

「この中には入れるのは一人だけだ、残りは近くにある家で待機している。誰にするか、さっさと選べ」

ソレイスの言葉に、無言でカイルが前に出る。

「カイル、頑張つてね」

仲間達の見送りを受けて、カイルが生命の樹の中に入ろうとすると、ウルザもそれについてきた。「ウルザ、君も待っていると言われたはずだ」

ソレイスが慌てて止めるが、ウルザは首を横に振る。

「それだけは聞けない。私はカイルと一緒に行く。責任は私がとる」

これは絶対に譲れないとばかりのウルザにソレイスは何か言いたそうだったが、結局首を振った後、ついてこいと言う。

「すまない、付き合わせて。ただでさえ無理を言っているのに……」

カイルは前を歩くソレイスに聞こえないよう、そっとウルザに話しかける。

今回エブンの森の長老会に話を持ち掛けることができたのは、全てウルザのおかげである。そのため相応な無理をしてくれたことは明らかだった。

「いいんだ、私は自分のやりたいことをやっているだけだ」

気丈に答えるウルザだが、表情は強張っており、内心ではそうとう緊張している様子だ。命令に逆らっているのだから、当然と言えば当然である。

カイルはそんなウルザを力づけるためか、手を絡めるように握る。

「あ……」

ウルザが声を上げるが、前を歩くソレイスに気付かれないよう慌てて口を押さえた。

「カイル……本当に説得できているのか？」

ウルザはカイルのことを信じてはいるが、どうしても不安を拭えないでいた。

「一人を除いて頭の固い人達ばかりで、その一人のおかげで話し合いの場は作れたが、そこまで。それにドワーフへの……偏見で凝り固まっている」

「策、というか考えはある。どちらにしろ避けては通れないんだ」

カイルはそう言うものの、エルフとしてエルフをよく知るウルザはやはり心配だ。

だがカイルは今まで、言ったことは必ず成し遂げてきた。ウルザが握っている手に力を籠めると、カイルも握り返す。そうすることによって、不安は少しずつ収まっていった。

そして幸か不幸か、背後でそんなことが行われているとも知らぬまま、ソレイスは振り返りもせず不機嫌そうに言う。

「人間よ、お前が何の話を持ってきたかは知らないが、期待はしないことだな」

今までと違い、それは忠告じみた発言だった。

「私が望むのはエルフの、この森の安定だ。それでも長老会に参加を許されている身だ、お前が妙な真似をしないよう監視させてもらうぞ！」

ソレイスも長老会に参加する、そう聞いてカイルは驚いた。

となると今までの態度は流石にまずかったのでは……と、今更ながら感情のまま行動したことを自省する。

ソレイスがウルザの幼馴染と知り、彼女への想いを感じ取ったために、つい挑発的な態度をとってしまったのだ。

大人げないかもしれないが、幼い頃の、自分の知らないウルザを知っているのだと思うと、ついやってしまったことだった。今だって気付かれるかもしれないのに手を繋いでいる。

「大丈夫だ。ああは言っているが、ただの補佐、というか見習いだ。念のために護衛も兼ねて参加を許されているだけで、発言権はない」

そっとウルザが耳打ちすると、カイルはほっとして、もう一度握っている手に力を籠める。

周りから見ればつまらなくてくだらない優越感だろうが、今のカイルにとっては何よりも大事なことだった。

4

やがて三人は奥にある扉の前についた。その中に入ると、木のテーブルと椅子が並んでおり、六人のエルフがいた。

ほとんどが老人で、顔に大きな傷を持つ者や穏やかな表情の老婆などだ。

これがエルフの代表者による長老会の面々であり、表面上こそ平然としつつも、ほとんどが胡乱^{うらん}な者を見る目をカイルに向けている。

その中でも上座にいるのは、他の者よりも比較的若い、人間なら五十歳前後と思われる男のエルフだ。

ソレイヌも酷^{ひど}かったがこちらも相当なもので、カイルを完全な敵として見ており、今すぐ斬りかかってきてもおかしくないほどである。

「カイル達を連れてきました……父上」

そして彼こそが、エブシロの森の長で、ウルザの父親でもあるリファロだった。

「初めまして、カイルと言います。この度はこうして話を聞いて頂ける機会を設けてくださって、誠にありがとうございます」

カイルとしては丁寧に挨拶したつもりだったが、リファロに反応はなく、ただひたすらに睨みつけてくる。

流石に沈黙に耐えきれなくなり、カイルの方から更に話しかけようとしたそのとき――

「ウルザ……」

リファロは何やら思いつめたかのような顔で、カイルではなく娘の方に話しかけた。

「お前が森を飛び出したとき、何故止められなかったと思う？」

「え？」

突然の質問に戸惑^{とまど}うウルザに構わず、リファロは続ける。

「お前は幼き頃から好奇心が強く、変化の乏^{とほ}しい森の中に飽き外の世界に興味を持つだろうと解っていた。止めても、いずれ振り切って出ていっただろう。だからこそお前には早くから精霊使役を教え、短剣の扱いも鍛えた。身を守るようにな……」

「で、では……」

「立场上、表立って支援などできるはずがないだろ」

自分の考えに耳を傾けず、常に反対するわからず屋の父だと、ウルザは思っていた。

だがリファロはリファロなりに娘を理解して、行動を黙認してくれたのだと知り、何も解っていなかったのは自分の方だと顔が赤くなる。

「……道理で簡単に^{しめつぽん}出奔できたと思いました……」

「お前は私の子として、いずれはこの神聖な森の守り手になってほしかった。それに備え、外で見聞を広めるといっても一つの手と考えていた」

エルフの森を治める長は世襲制というわけではないが、ある程度は血筋も考慮される。外の世界を知るのもそのための経験だと、リファロは期待したのだろう。

「だからこそ涙を吞んで、断腸の思いで送り出した……お前は外で何を見てきた？ 何を経験してきた？」

「い、色々です。とてもこの場で説明できるものでは……」

言葉を濁すような言い草だが、ウルザが言う通り本当に色々あった。ありすぎたのだ。

確かにはじめはごく普通の旅だったはずだが、カイルに会って以降は、もはや吟遊詩人の英雄譚の方が現実味があるくらいだ。

ジルグス国のミレーナ王女を王位継承問題にからむ暗殺騒動から救ったかと思えば、魔族とも戦い、竜王ゼウルスにも会ったし、魔族領で魔王ルイーザにも会った。

挙句の果てに女神メーラにまで会ったとても話そうものなら、信じる信じない以前に精神状態を疑われるだろうから、ここで正直に報告するわけにもいかない。

「確かに色々あったようだな。成長の証^{あかし}が見える……どうやら上位精霊も使役できるようになったと見える」

「な……」

これには、部屋の隅で黙って見ていたソレイスが思わず声を上げてしまう。

エルフは総じて精霊使いではあるが、上位精霊まで使役できる者となると数えるほどしかおらず、ましてやウルザのような若いエルフでは皆無に近い。

「それでも親だ、娘の成長くらい顔を見れば解る……よく精進^{しやうじん}したな、本当に……」

「あ、ありがとうございます……」

リファロの優しい声と穏やかな微笑みは、我が子の成長を喜ぶ親のそれであり、ウルザもそんな父に対して素直に礼を言えた。

長い間抱えていた父への誤解やわだかまりが解けたような気分になり、ウルザは久しぶりに父に笑顔を向けられそうな気がした。

しかしすぐに、状況は一変する。

「だが……だがやはり反対すべきであった。お前を閉じ込めてでも外に行かせるべきではなかつ